

**福祉系大学生の学生支援に関する研究  
－大学生活不安尺度を使用して－**

阿部 征大・門屋 貴久・清宮 孝文

**Student Support Services for University Students  
Majoring in Social Welfare:  
Use of the University Life Anxiety Scale**

Yukihiro Abe, Takahisa Kadoya, Takafumi Kiyomiya

**神戸医療福祉大学紀要 第20巻 第1号**  
(令和元年12月)

＜原著＞

福祉系大学生の学生支援に関する研究  
－大学生生活不安尺度を使用して－

阿部 征大<sup>1)</sup>・門屋 貴久<sup>2)</sup>・清宮 孝文<sup>3)</sup>

Student Support Services for University Students Majoring in Social Welfare:  
Use of the University Life Anxiety Scale

Yukihiro Abe<sup>1)</sup>, Takahisa Kadoya<sup>2)</sup>, Takafumi Kiyomiya<sup>3)</sup>

The objective of this study was to examine the level of anxiety experienced by university students by administering the University Life Anxiety Scale to students majoring in social welfare in order to assist in the provision of student support. The participants were 214 university students majoring in social welfare. The research was conducted using questionnaires.

The results of the study revealed that

- 1) A higher percentage of students majoring in social welfare experienced anxiety regarding their studies and employment.
- 2) Women had higher anxiety levels than men in “daily life” and “evaluation.”
- 3) Anxiety was also high for the “university maladaptation” factor in “the university I enrolled in was not my first choice” and “I don't have a place to belong” groups.

**Key words** : Students Majoring Welfare, University life anxiety scale, Student support  
福祉系大学生、大学生生活不安尺度、学生支援

## I .はじめに

近年、大学教育の在り方について問われている。文部科学省は、先行きの予測が困難で変化の激しい現在の社会においては、これまで以上に一人一人が能力を磨き、高めていくことが必要不可欠であり、そのための重要な鍵が大学教育であると示している<sup>1)</sup>。そして、大学教育には、「学術研究を通じて新たな知を創造するとともに、自らの教育理念に基づく充実した教育活動を展開することによ

り、生涯学び続け、主体的に考える力を持ち、未来を切り拓いていく人材を育成すること」<sup>1)</sup>が求められる。この為、「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」「教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」「入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)」の3つのポリシーを策定した<sup>1)</sup>。また、文部科学省は、大学教員の関心は自らの研究に向けられ、学生の教育に関する責任を十分認識していないとし、大学教員が研究に重点を置く「教員中心の大学」から、

1) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

2) 松山大学 (MATSUYAMA UNIVERSITY) 〒790-8578 愛媛県松山市文京町4番地2

3) 日本体育大学大学院博士後期課程 (Nippon Sport Science University) 〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1

学生に対するきめ細かな教育・指導に重点を置く「学生中心の大学」へと、視点の転換を図ることが重要であると指摘している<sup>2)</sup>。更に、正課教育や正課外教育の中で、学生が社会との接点を持つ機会を多く与え、学生の自主的な活動を支援するなど、各大学がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ、個性化や多様化を進める中で適切に取り組んでいくことやその在り方について積極的な見直しが必要であるとしている<sup>2)</sup>。

わが国には、人口減少・労働力不足といった諸問題があり、その解決策の一つとして質の高い教育を通じ、多様な能力を持つ人材の育成が挙げられる。そして、今後は多様な機能を持つ高等教育機関の重要性が更に高まる<sup>3)</sup>と考えられていることから、大学教育の中で、多様な学生に対する対応や「学生中心の大学」への変容が求められていると言える。

社会の様々な諸問題からも大学教育は変容を求められている。昨今、「将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしない」等、若者の生活意識が変容してきており、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」志向の若者も増加傾向<sup>4)</sup>にある。この問題について文部科学省は、社会環境の変化が、子どもたちの成育環境を変化させたと同時に子ども達の将来にも多大な影響を与えたことを認識することが重要<sup>5)</sup>であると報告している。このような状況への具体的な取組みとしては、大学・短期大学において、教育課程上の工夫や有機的な連携体制の確保等、多種多様な取組みを推進していくことが期待されている。重点を置く機能や養成する人物像を明確化し、職業教育の充実を図ることや生涯学習ニーズに応えていくことも重要な役割である<sup>6)</sup>。これらのことから、各大学が多様な能力を持つ人材育成のために多岐にわたる取組

みを推進していくことが重要であると言える。

一方、学生に着目すると、近年学生の多様化による様々な課題が挙げられている。例えば、谷田川は、学力的にもこれまで大学に進学しなかった層が大学に入学するようになり、大学生の質の変化・学力低下・中途問題が浮上した<sup>7)</sup>と指摘し、福田は、「一昔前なら18~22歳は立派な成人だったが、今はそういえない、発達上、青年期という思春期と成人期の間で微妙な時期になる。以前は、より年少に出るとされていた問題（不登校や家庭内暴力、発達障害、抜毛症、チックなど）が大学生でも当たり前に見られる」<sup>8)</sup>と指摘している。この様に、学生の多様化による課題から大学教育の困難さが伺われる。また、学生支援の観点から見てみると、大学適応に学校側の支援を必要とする学生は増加しているものの、現代の学生に共通するような支援だけでなく、大学や個人によって異なる背景に即した形での支援も同時に行っていく必要があること<sup>9)</sup>や潜在的に悩みを抱えている学生に対するサポートが必要であり、大学別や学生一人一人にどのようなサポートが必要であるか考えるべきである<sup>10)</sup>と指摘している。これらの様に、大学教育や学生支援をより有意義なものとする為には、多様化する学生の現状を詳細に把握する必要がある。この為、藤井<sup>11)</sup>は大学生の不安感を数値化するための大学生生活不安尺度を作成した。これまでに大学生生活不安尺度を用いた研究は数多くされており、学部・学科や学年等の様々な属性から大学生生活における不安感を分析し、不安感を早期に発見するために効果的な一つの手段と分析した。この結果、「女子学生の方が男子学生よりも不安を強く感じており、学年が上がり大学生生活に馴染めば馴染むほど一般に下がる」<sup>11)</sup>とし、学生の不安感における性差と学年間の差を明らかにした。し

かし、徳田<sup>12)</sup>、野中ら<sup>13)</sup>の研究においては、大学生活における不安の性差は表れなかったとしている。また、大石ら<sup>14)</sup>の研究では、3,4年生よりも1,2年生の方が不安は強く、部活動所属群の方が不安は強いことが明らかとなった。これらの研究から、大学や学部・学科、学年、部活動加入の有無、地域等によって学生の不安感について差異があることが明らかとされている。また、同様の尺度にて調査した鈴木<sup>15)</sup>は、学生がどのようなサポートを利用しているのか、どのようなサポートを必要としているのかを調査することを課題として挙げ、門屋ら<sup>16)</sup>は、調査の継続の実施、学生の多様化や時代の変化に対応していかなければならないことを指摘している。そして、藤井は、「大学生が大学にのみならず日常生活においてどのような不安を多く感じているのかを大学教官自らが知り、それをもとに改善していく姿勢こそが今まさに問われてきている」<sup>11)</sup>と指摘している。

日本学生支援機構<sup>17)</sup>は、学生の個性ニーズに対応した学生支援の基本的な考え方を示し、学生支援体制を統括する機能を大学が有することが重要であると明記している。同時に、日常的な学生支援、制度化された学生支援、専門的な学生支援を各大学の個性・特色を活かして整備することの重要性<sup>17)</sup>も示している。つまり、各大学が所属する学生の現状を把握し、大学教員と共通理解のもと高等教育機関としてその責務を果たすため、大学の特色を鑑みた学生支援の方向性を示す必要がある。

その学生支援の方向性を考える必要がある。この為、藤井の大学生生活不安尺度<sup>11)</sup>を用いて学生が現在どのような不安を抱えているのかを測定するものであり、この大学生生活不安尺度を用いた研究は多岐に渡り、様々な大学を対象に研究が行われている。しかし、これらの先行研究から福祉系大学生の不安に

着目している研究は見受けられない。福祉系大学生の進路選択やキャリア形成支援について研究した藤原は、「専門資格が取得できる大学では学生自身が何を学びたいのか、どのような資格を取得したいのかを意識している。そして、入学する時点で就職についても意識している」<sup>18)</sup>と述べ、福祉系大学はキャリア教育とは別に職業教育が存在し、その要因を資格の取得課程に実習が位置づくると特徴を挙げている<sup>18)</sup>。したがって、福祉系大学生は、入学前から将来の就職先が絞られている為、福祉系大学の学生は他系の大学とは異なる不安を抱える可能性が示唆される。

そこで本研究は、福祉系大学生に着目し、不安感の特徴や傾向、属性ごとの不安要因を藤井<sup>11)</sup>の大学生生活不安尺度を用い、福祉系大学生の不安を明らかにし、学生支援の一助とすることを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、福祉系大学に通う大学生の学生生活への不安感を明らかにするため、福祉系 A 大学の学生214名を対象に、集合調査法を用いて実施した。

### 2. 調査時期及び内容

本調査は、日本体育大学ヒトを対象とした実験等に関する規定に基づき、説明書、同意書、審査申請・研究計画書を提出し、倫理審査委員会の承認（第014-H43）を受け、2019年7月に行った。

調査内容は、以下の通りである。

#### (1) 対象者の属性に関する設問

基本的属性は、「性別」「入学時第一希望の大学であるか」「大学生活において居場所があると感じているか」を設定した。

表1 大学生生活不安尺度

大学生生活不安尺度（項目）	大学生生活不安尺度（省略）
<b>【日常生活不安】</b>	
1. 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。	公的自己意識
2. 4年間で卒業できるかどうか、不安です。	卒業
3. 留年したらどうしようと、気になります。	留年
4. 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります。	事故・病気
5. 友達と一緒に何かしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。	友達
6. 部活やサークルで先輩たちとうまくつき合えるか心配です。	先輩
7. 1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です。	1限の授業への出席
8. 何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です。	団体への勧誘
9. 先生が近くにいると気になって仕方ありません。	先生との距離
10. 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です。	1ヶ月の生活費
11. 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。	授業理解
12. 大学の先生と話をするときは、とても緊張します。	先生との会話
13. 先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら何を言われるかとても気になります。	先生からの呼出
14. 将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です。	就職
<b>【評価不安】</b>	
15. 授業中に何かをしなければならぬとき、へまをするのではないかと不安になることがあります。	授業中のへま
16. 必須科目の成績がD（不可）だったらどうしようと心配になることがあります。	必須科目の単位
17. テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。	テスト（時間不足）
18. テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。	テスト（解答不可）
19. 成績のことが気になって仕方ありません。	成績
20. 大学の成績のことを考えると、憂鬱です。	成績による憂鬱
21. 申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。	授業単位
22. テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。	テスト（緊張）
23. 授業で発表するとき、声が震えることがあります。	授業（緊張）
24. 卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。	卒業論文
25. テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。	テスト（結果）
<b>【大学不適應】</b>	
26. こんな大学にいたら自分がダメになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。	大学への不信感
27. この大学にいて、何か不安な気持ちになります。	大学への不安
28. できることなら、転学あるいは転部したくて仕方ありません。	転学・転部
29. 入学した学部が自分にあっていないような気がして不安です。	学部不適應
30. 大学を退学したいと思うことがあります。	退学

## (2) 大学生生活不安尺度

調査項目は、藤井<sup>11)</sup>の「大学生生活不安尺度」30項目を用い、「はい・いいえ」で回答を求めた。また、尺度に関しては3つの下位尺度に分かれ、①大学の日常生活に対する不安感(日常生活不安)②大学における単位や試験に対する不安感(評価不安)③不登校や中退といった就学上の問題を生じさせる大学不適応感(大学不適応)となる。尺度の測定方法は、30点満点で点数を算出し、点数が高ければ不安が高い。尚、藤井<sup>11)</sup>の下位尺度の信頼性は、Cronbachの $\alpha$ 係数で算出しており大学生生活不安尺度は.84、下位尺度の「日常生活不安」が.75、「評価不安」が.87、「大学不適応」が.83といずれも一貫性の高い項目で構成されている。妥当性に関しては、日本版MAS、青年版TAIと相関関係を調べ、いずれも高い相関関係が認められ、基準連関妥当性が得られている。また、大学生生活不安尺度は、2013年にCLAS(College Life Anxiety Scale)マニュアル<sup>19)</sup>として発行されており、信頼性および妥当性が高い尺度と言える。このことから、本研究では藤井の30項目3因子(日常生活不安・評価不安・大学不適応)の構造を用いて福祉系大学生の不安を明らかにする。

表1は、質問項目と各項目に対する省略名称及び因子項目である。

## 3. 分析方法

### (1) 単純集計

各項目の回答を集計し、大学生生活不安尺度の項目に関しては不安が高い割合から順位付けを行った。

### (2) t検定

属性別に大学生生活不安要因を明らかにするため、各属性の比較を行った。属性の分析は、①「男性」と「女性」、②「在籍大学第一希望」と「在籍大学第一希望でない群」、③「居場

所がある群」と「居場所がない群」である。

### (3) Pearsonの相関分析

「大学生生活不安尺度因子」と「学生生活の満足度」の関係性を明らかにするため、Pearsonの相関分析を行った。

### (4) 統計処理

本調査の分析は、SPSS Statistics25を用いて行い、統計有意水準は5%未満とした。

## Ⅲ. 結果

表2は、調査対象者の属性をまとめた結果である。性別では、「男性」66.4%、「女性」32.7%、在籍大学が第一希望については、「はい」71.8%、「いいえ」28.2%、居場所の有無については、「はい」88.9%、「いいえ」11.2%という結果であった。

表2 調査対象者の属性

項 目	調査対象者の属性		
	度数	%	
性 別	男性	142	66.4
	女性	70	32.7
	<i>n.a</i>	2	0.9
第一希望	はい	150	71.8
	いいえ	59	28.2
	<i>n.a</i>	5	2.3
居 場 所	はい	186	88.9
	いいえ	24	11.2
	<i>n.a</i>	4	1.9

*n*=214

表3は、大学生生活不安尺度30項目を不安が高い項目から順位付けを行った結果である。大学生生活不安尺度の項目において不安の割合が高かった順位(上位5位)は上から、「就職」71.5%、「卒業論文」68.4%、「テスト(結果)」60.4%、「必須科目の単位」59.3%、「授業単位」56.5%であった。

表3 大学生生活不安尺度(項目別)

順位	項目	不安	不安でない
1	就職	71.5	28.5
2	卒業論文	68.4	31.6
3	テスト(結果)	60.4	39.6
4	必須科目の単位	59.3	40.7
5	授業単位	56.5	43.5
6	成績	51.2	48.8
7	留年	49.1	50.9
8	事故・病気	46.0	54.0
9	卒業	45.3	54.7
10	テスト(時間不足)	43.9	56.1
11	成績による憂鬱	43.9	56.1
12	授業理解	42.0	58.0
13	公的自己意識	41.6	58.4
14	テスト(解答不可)	40.8	59.2
15	一限の授業への出席	38.5	61.5
16	一ヶ月の生活費	35.0	65.0
17	先生からの呼出	34.1	65.9
18	大学への不安	33.3	66.7
19	大学への不信任	31.9	68.1
20	友達	31.8	68.2
21	授業中のへま	28.5	71.5
22	授業(緊張)	28.3	71.7
23	テスト(緊張)	26.1	73.9
24	先輩	24.3	75.7
25	退学	23.2	76.8
26	転学・転部	20.7	79.3
27	先生との距離	18.2	81.8
28	学部不適應	18.0	82.0
29	先生との会話	12.6	87.4
30	団体への勧誘	9.3	90.7

数値は%表記

表4は、大学生生活不安尺度得点の平均値の結果である。「尺度全体」11.06点、「日常生活不安」4.95点、「評価不安」5.01点、「大学不適應」1.28点という結果であった。

表4 尺度得点

項目	M	SD
尺度全体	11.06	7.46
日常生活不安	4.95	3.45
評価不安	5.01	3.61
大学不適應	1.28	1.59

表5-1は、大学生生活不安尺度項目を調査対

象者の性別において因子間比較した結果である。「尺度全体」「日常生活不安」「評価不安」において「女性」が「男性」より有意に高い値を示した。

表5-1 大学生生活不安尺度の性別における比較(因子間比較)

項目	男性 (n=141)		女性 (n=68)		t値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	10.1	7.85	13.17	6.06	2.97**
日常生活不安	4.66	3.67	5.62	2.81	2.07*
評価不安	4.36	3.63	6.44	3.15	3.99***
大学不適應	1.22	1.62	1.38	1.54	0.66

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表5-2は、大学生生活不安尺度項目を調査対象者の性別において項目間比較した結果である。「公的自己意識」「友達」「就職」「必須科目の単位」「テスト(時間不足)」「テスト(解答不可)」「成績による憂鬱」「授業単位」「卒業論文」「テスト(結果)」において「女性」が「男性」より有意に高い値を示した。

表5-2 大学生生活不安尺度の性別における比較(項目間比較)※有意項目

項目	男性 (n=141)		女性 (n=68)		t値
	M	SD	M	SD	
公的自己意識	0.35	0.47	0.54	0.50	2.64***
友達	0.27	0.44	0.41	0.49	1.98*
就職	0.64	0.48	0.87	0.33	4.04***
必須科目の単位	0.54	0.50	0.70	0.46	2.27*
テスト(時間不足)	0.33	0.47	0.66	0.47	4.69***
テスト(解答不可)	0.33	0.47	0.57	0.49	3.32***
成績による憂鬱	0.34	0.47	0.64	0.48	4.37***
授業単位	0.50	0.50	0.70	0.46	2.88**
卒業論文	0.58	0.49	0.90	0.30	5.71***
テスト(結果)	0.52	0.50	0.77	0.42	3.66***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表6-1は、大学生生活不安尺度項目を調査対象者の第一希望の有無において因子間比較した結果である。「大学不適應」において「在

籍大学が第一希望でない群（いいえ）」が「在籍大学が第一希望である群（はい）」より有意に高い値を示した。

表 6-1 大学生生活不安尺度の第一希望の有無における比較（因子間比較）

項目	はい (n=147)		いいえ (n=59)		t 値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	11.00	7.44	11.15	7.55	0.08
日常生活不安	4.96	3.45	5.00	3.46	0.07
評価不安	5.10	3.56	4.75	3.75	0.62
大学不適応	1.12	1.55	1.68	1.65	2.27*

\* $p < .05$

表6-2は、大学生生活不安尺度項目を調査対象者の第一希望の有無において項目間比較した結果である。「大学への不信感」「学部不適応」において「在籍大学が第一希望でない群（いいえ）」が「在籍大学が第一希望である群（はい）」より有意に高い値を示した。

表 6-2 大学生生活不安尺度の第一希望の有無における比較（項目間比較）※有意項目

項目	はい (n=147)		いいえ (n=59)		t 値
	M	SD	M	SD	
大学への不信感	0.27	0.44	0.46	0.50	2.46*
学部不適応	0.15	0.35	0.25	0.43	2.47*

\* $p < .05$

表7-1は、大学生生活不安尺度項目を居場所の有無において因子間比較した結果である。「大学不適応」において「居場所がない群（いいえ）」が「居場所がある群（はい）」より有意に高い値を示した。

表 7-1 大学生生活不安尺度の居場所の有無における比較（因子間比較）

項目	はい (n=184)		いいえ (n=23)		t 値
	M	SD	M	SD	
尺度全体	10.75	7.23	13.82	8.34	1.84
日常生活不安	4.79	3.34	6.13	3.73	1.78
評価不安	4.92	3.50	5.83	3.76	1.16
大学不適応	1.17	1.53	2.17	1.87	2.87**

\*\* $p < .01$

表7-2は、大学生生活不安尺度項目を居場所の有無において項目間比較した結果である。「先生との距離」「大学への不安」において「居場所がない群（いいえ）」が「居場所がある群（はい）」より有意に高い値を示した。

表 7-2 大学生生活不安尺度の居場所の有無における比較（項目間比較）※有意項目

項目	はい (n=184)		いいえ (n=23)		t 値
	M	SD	M	SD	
先生との距離	0.15	0.35	0.42	0.50	2.56*
大学への不安	0.30	0.45	0.63	0.49	3.26***

\*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

表8は、Pearson の相関係数を用いて、「大学生生活不安尺度因子」と「学生生活の満足度」の関係性を分析した結果である。「居場所」「大学友人」「大学生生活」においていずれも「大学不適応」に対し、有意に負の相関が見受けられた。特に「居場所」では、相関係数が  $r = -0.53$  となり、比較的高い負の関係性があった。

表 8 大学生生活不安感に対する要因の検証（相関分析）

項目	尺度全体	日常生活不安	評価不安	大学不適応
学生生活について	-0.04	-0.03	0.07	-0.28***
居場所	-0.22***	-0.19**	-0.11	-0.53***
大学友人	-0.18*	-0.14*	-0.10	-0.27***
大学生生活	-0.16*	-0.11	-0.04	-0.40***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

#### IV. 考察

本研究は、福祉系大学生における不安感の特徴や傾向、属性ごとの不安要因を藤井<sup>11)</sup>の大学生生活不安尺度を用いて明らかにし、福祉系大学生への学生支援の一助とすることを目的とした。

大学生生活不安尺度を項目別に順位付けした結果、最も高い値は「就職」であり、次いで「卒業論文」「テスト(結果)」「必須科目の単位」「授業単位」という「学業」に関連する項目であったことから、本調査対象者は、「就職」と「学業」に対して不安が高い傾向にあることが明らかとなった。

大学生生活不安尺度を使用した藤井<sup>11)</sup>と鈴木<sup>15)</sup>の研究では、最も不安感の高い項目が「卒業論文」であり、門屋<sup>16)</sup>の調査においては、「授業単位」が最も不安感の高い項目として示されている。本調査においても、「卒業論文」「テスト(結果)」「必須科目の単位」「授業単位」が不安における項目の上位であったが、「就職」と「学業」に対して不安が高い傾向は大学生生活不安における福祉系大学の特徴の一つと言える。これについては、福祉系大学の教育課程が職業教育との結び付きに特徴があり、日々の学業から就職に関しての連想が容易であることが要因の一つと考えられる。文部科学省は、「高い学力と豊かな人間性を身につけさせた上で、社会に送り出す社会的使命を負っている。その責務を果たすためには、正常な学校教育と学生の学修環境を確保することが不可欠である」と言及し、就職に関しての具体的な取組みを大学が学生に十分周知すること、学部・分野別の就職実績等の情報の積極的な提供に努めること<sup>20)</sup>と報告している。また、企業側への通知<sup>21)</sup>では、学生が学業に安心して専念できるよう十分に配慮することを報告している。更に、藤原は、

「社会福祉に特化した課程は明確に位置づけられ、そこで資格取得に向けた価値、知識、技術が習得される。この課程は明らかに職業教育といえることができる」<sup>18)</sup>と指摘している。この様に、大学生の学習環境の充実、学部や分野別の就職実績を提供することが各大学に求められており、福祉系大学では、その課程で習得される職業教育と合わせ就職に関する情報を効果的に提供することが重要である。そして、藤井<sup>11)</sup>が「大学生は日常生活における様々な不安より学生の本分である学業に対する不安をより強く感じている」と指摘しているように、学業に対する支援の重要性もある。

全体の大学生生活不安尺度の平均値は11.06点であった。同様の尺度を用いて、スポーツ系コースの学生を対象に調査した鈴木<sup>15)</sup>の研究では13.17点、経済・経営・人文・法学部の学生を対象とした門屋<sup>16)</sup>の研究では13.06点、教育学部の学生を対象とした田中<sup>22)</sup>の研究では11.35点、体育系大学生を対象とした清宮<sup>10)</sup>の研究では10.15点、関東の大学10校(国立大学5校、私立大学5校)の学生を対象とした藤井<sup>11)</sup>の研究では9.17点であった。これらの研究結果と比較すると、本調査で得られた大学生生活不安尺度の平均値はおおよそ中間に位置していた。しかし、学生の中には20点を超える学生も混在しているため、個々の学生に寄り添ったサポート体制の充実が求められる。

大学生生活不安尺度における項目を性別において比較するとすべての因子において「女性」の方が不安が強かった。特に「日常生活不安」「評価不安」の因子において「女性」が「男性」より有意に高い値が示された。更に、「女性」が「男性」より有意に高い値が示された項目では、「テスト(時間不足)」「テスト(解答不安)」「成績による憂鬱」「卒業論文」「テス

ト(結果)」という「学業」に関して項目が多く挙げられた。清宮ら<sup>10)</sup>の研究では、女子学生の不安感が男子学生より高く、女子学生の支援の構築が重要であると指摘し、女子大学生に焦点を当てた川上<sup>23)</sup>の研究では、多様な不安感や不適応感を、個別に扱っていくことが、大学側のきめ細かな対応として求められるとされているように、女子学生の支援体制の構築がより求められている。また、興久田らは、「女子大生が、教員や専門家といったフォーマルな対象の力を借りるより、友人や家族といったインフォーマルな対象の力を借りることによって、自らの課題・問題を多く解決している」<sup>24)</sup>とし、岡らは、「福祉系大学生の多くが、人とのかかわりの中で進路選択を行っており、他者(周囲の教員や家族、友人等)の反応によって自己を洞察したり理解したりする」<sup>25)</sup>と指摘している。女子学生に対する支援は、友人や家族等を取り巻く環境に目を向けることが必要である。更に、福祉系大学では、資格の取得課程で実習が存在し、学外でも様々な人とコミュニケーションを通じ実践力や応用力が身に付く場がある。実習のカリキュラムから学生に対する支援体制を築き上げることが重要である。

次に、「在籍大学が第一希望である群」と「在籍大学が第一希望でない群」の比較においては、「在籍大学が第一希望でない群」が「在籍大学が第一希望である群」に比べ「大学不適応」の因子において有意に高い値を示した。森は、「志望の大学に入学できず、学習意欲を失ってしまったいわゆる不本意入学者への対応は深刻である」<sup>26)</sup>と述べているように、「在籍大学が第一志望でない群」の学生に対する支援強化の必要性が伺える。見館らは、「学習意欲」や「学生生活の満足度」に対して「教員とのコミュニケーション」が影響を与える<sup>27)</sup>ことを指摘している。更に、門屋<sup>16)</sup>

は、「教員とのコミュニケーション」について、講義等はもとよりゼミナール活動やオフィスアワー、その他の様々な状況において教員が学生と有意義なコミュニケーションを図ることの重要性を述べ、その重要性を大学教員が再度理解し、実践していくことが学生の「学習意欲」や「大学生生活の満足度」の向上に繋がるとしている。これらのことから、大学教員と学生との関係性も不安解消のための重要な要素である。不安を抱える学生をいち早く発見するためには、教員が普段から学生と関わりを多く持つことが重要であり、大学としても教員の学生への関わりを支援することは、大学全体の学生支援の充実に繋がる。また、教育経験の少ない若手の教員が学生支援を行う際は、サポート役として学生支援コーディネーターの介入も有効であり、学生支援コーディネーターにより、教育経験の少ない若手の教員が学生支援に対する意識が変化することが多いという報告がされている<sup>28)</sup>。

そして、「居場所がある群」と「居場所がない群」の比較においては、「居場所がない群」が「居場所がある群」に比べて「大学不適応」の因子において有意に高い値を示した。更に、「居場所がない群」が「居場所がある群」より有意に高い値が示された項目は、「先生との距離」「大学への不安」であった。「居場所」について西中は、対人関係を中心に据えた概念<sup>29)</sup>と述べており、「居場所」は人との関連性が強い。文部科学省の不登校に関する報告書<sup>30)</sup>において、学校が「心の居場所」の役割を果たすことの重要性を提唱していることもあり、1995年以降学校での「居場所」が注目されてきた。糸原らは「大学において居場所感を有していない学生は、大学に居場所感を有している学生よりも、大学生生活における不安を高く感じている」<sup>31)</sup>と述べ、中西<sup>32)</sup>は、「居場所」の欠如は人の生死にさえ

影響を与えると述べていることから、大学での学生の「居場所」については見逃すことのできない重要な要素である。また、「先生との距離」に対しての不安も表れている為、「居場所」を有していない学生に対しては、特に「教員とのコミュニケーション」を含めた教員と学生との関係性が極めて重要であると言える。他大学の取組み<sup>28)</sup>では、日常的な情報共有や協力・協同ができる仕組みとし、「健康管理」「学生生活」「修学支援」の立場からキャンパスライフ・健康支援センターを開設し学生支援を実施した。このことより、教員の学生支援に対する意識の向上や支援を必要とする学生を把握がしやすくなったと報告され<sup>28)</sup>、福祉系大学生においても、このような支援体制の構築が必要であると考えられる。

「大学生活不安尺度因子」と「大学生活不安尺度項目」の関係性を分析した結果、「学生生活について」「居場所」「大学友人」「大学生活」においていずれも「大学不適応」に対し、有意に負の相関が見受けられた。これにより、大学生活、大学の友人、自分の居場所、学生支援に満足している調査対象者ほど、大学不適応が減少する傾向が示された。吉村<sup>33)</sup>は、大学への満足度は人生の満足度に影響を与える可能性があり、資格や検定に向けた講義の充実や就職活動におけるサポート全般が、満足度に大きく影響を与えていると指摘していることから、充実した大学生活を送ることは、大学生活以外にも私生活での満足感に結び付く可能性あると思われる。田川は、「大学入学後の『良さ』の発見の積み重ねを学生に多く体験してもらうことが大学の課題」<sup>34)</sup>と述べているが、これはまさに学生全体に当てはまることであり、大学不適応を不安に感じている群に関しては、大学生活に満足を与える様々な支援体制が重要となる。そして、学生支援に関して、下平は「学

生支援においては一般的な傾向を把握するだけでなく個別に考えることも重要である」<sup>35)</sup>と指摘している。この様に、きめ細かな学内サポートだけでは無く、友人関係を構築するためのきっかけ作りや学生が教員にいつでも相談できる様な環境作りをすることにより大学生活の不安の解消に繋がるとされる。その為にも、学生の傾向を把握すると共に個別支援の重要性が示唆されている。また、松本は、「講義満足が高いほど、居心地・利便性がよいほど、講義水準不満が低いほど、大学全体の満足度が高くなるといえる」<sup>36)</sup>と述べていることから、講義の重要性が伺われ、日々の研究活動から得た新たな知見を学生に教授することも学生の生活不安の解消や学生生活の満足度を高める要因になるのではないかと考えられる。

## V. まとめ

本研究の目的は、福祉系大学生の不安感の特徴や傾向、属性（性別・入学時第一希望の大学であるか・大学生活において居場所があると感じているか）ごとの不安要因を明らかにし、学生支援の一助にすることである。

本研究で明らかとなったことは以下に集約される。

- (1) 福祉系大学生は「就職」と「学業」に対して不安が高い傾向にあることが明らかとなった。
- (2) 属性による比較では、女性が男性よりも不安が高い傾向にあり、「日常生活不安」と「評価不安」が有意に高い値となった。
- (3) 「在籍大学が第一希望でない群」と「居場所がない群」は、大学不適応感を感じている傾向にあることが明らかとなった。

このことから、福祉系大学生の学生支援は、就職に関しての情報を効果的に提供し、学業に対して支援することが重要であり、実習を通し学生に対する支援体制を築き上げることが重要である。また、教員が普段から学生との関わりを多くもつこと、大学としても教員の学生への関わりを支援することが求められ、大学全体の学生支援の充実に繋がる。

## VI. 参考引用文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2016) 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー) 及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー) の策定及び運用に関するガイドライン。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/\\_\\_icsFiles/afie/ldfile/2016/04/01/1369248\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/__icsFiles/afie/ldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf) (参照日2019年9月25日)
- 2) 文部科学省 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -」。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm) (参照日2019年9月25日)
- 3) 一般社団法人日本経済団体連合会 (2018) 今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言 - 概要版 -。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/\\_\\_icsFiles/afie/ldfile/2018/10/12/1410146\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/__icsFiles/afie/ldfile/2018/10/12/1410146_1.pdf) (参照日2019年9月25日)
- 4) 文部科学省 (2004) 「キャリア教育が求められる背景とその基本的な考え方」。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/05062401/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05062401/001.htm) (参照日2019年9月25日)
- 5) 文部科学省 (2011) 「キャリア教育とは何か」。  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afie/ldfile/2011/06/16/1306818\\_04.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afie/ldfile/2011/06/16/1306818_04.pdf) (参照日2019年9月25日)
- 6) 文部科学省「第4章高等教育におけるキャリア教育・職業教育の実施方策」。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/attach/1300247.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/attach/1300247.htm) (参照日2019年9月25日)
- 7) 谷田川ルミ: 戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開、名古屋高等教育研究、12、166-168、2012
- 8) 福田真也: 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック - 精神科と学生相談からの15章 - 金剛出版、東京、2007
- 9) 中島絵美: 時代や大学の特色に応じた学生相談の取り組みの検討 - 大学生不適應の予防的アプローチ -、こども教育宝仙大学紀要、3、132、2012
- 10) 清宮孝文、依田充代、門屋貴久: 体育系大学生の大学生生活不安に関する研究、日本体育大学紀要、45 (1)、27-37、2015
- 11) 藤井義久: 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、心理学研究、68 (6)、441-448、1998
- 12) 徳田完二: 学生期ライフサイクルからみた学生の不安 - 4年制大学生と短期大学生の違いについて -、人間福祉研究、8、179-188、2005
- 13) 野中優実、山田浩平: 大学生のユーモアと大学生生活不安との関連、愛知教育大学保健環境センター紀要、12、45-52、2013
- 14) 大石千歳、浅見美弥子、奥野知加、渡辺

- 博之、若山章信、今丸好一郎、中本哲：東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2-精神的健康に関する基礎調査-、女子体育研究所所報、1、23-48、2007
- 15) 鈴木慶子：大学生活の不安に関する意識調査-スポーツ系コースに所属する学生を対象に-、駿河台大学論叢、53、153-159、2016
- 16) 門屋貴久、清宮孝文、阿部征大：松山大学生に対する学生支援の在り方に関する研究-大学生活不安に着目して-、松山大学論集、30 (6)、143-165、2019
- 17) 独立行政法人日本学生支援機構 (2007)：大学における学生相談体制の充実方策について-「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協同」。  
[https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/09/jyujitsuusaku\\_2.pdf](https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/_icsFiles/afieldfile/2015/12/09/jyujitsuusaku_2.pdf) (参照日2019年11月19日)
- 18) 藤原慶二：福祉系大学におけるキャリア形成支援-働くことから考えるキャリア教育の導入意義-、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要、17 (2)、1-7、2014
- 19) 藤井義久：CLAS マニュアル、金子書房、21、2013
- 20) 文部科学省 (2019) 「2020年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について (申合せ)」(大学向け) について。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/03/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/25/1414713\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/_icsFiles/afieldfile/2019/03/25/1414713_1.pdf) (参照日2019年11月18日)
- 21) 文部科学省 (2019) 「2020年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について (申合せ)」(企業向け) について。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/03/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/25/1414713\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/_icsFiles/afieldfile/2019/03/25/1414713_1.pdf) (参照日2019年11月18日)
- 22) 田中存、菅千索：大学生活不安に関する心理学からのアプローチ、和歌山大学教育学部紀要教育科学、57、15-22、2007
- 23) 川上正浩：女子大学新入生の大学生活における不安について-3年度分データの比較検討-、人間科学研究紀要、5、71-78、2006
- 24) 與久田巖、太田仁、高木修：女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連、関西社会学部紀要、42 (2)、105-116、2011
- 25) 岡多枝子、三並めぐる：福祉系高校生及び大学生のキャリア形成、日本福祉大学社会福祉論集、123、127-139、2010
- 26) 森朋子：「初年次セミナー導入時の授業デザイン」初年次教育学会編初年次教育の現状と未来、世界思想社、165-166、2013
- 27) 見館好隆、永井正洋、北澤武、上野淳：大学生の学習意欲、大学生活の満足度を規定する要因について、日本教育工学会論文誌、32 (2)、189-196、2008
- 28) 独立行政法人日本学生支援機構 (2017)：大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成29年度) 結果報告。  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2018/11/29/1\\_kekka.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/11/29/1_kekka.pdf) (参照日2019年11月20日)
- 29) 西中華子：居場所づくりの現状と課題、神戸大学発達・臨床心理学研究、13、7、2014
- 30) 文部科学省 (1992) 登校拒否問題への対応について。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nct19920924001/t19920924001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nct19920924001/t19920924001.html) (参照日2019年9月28日)
- 31) 桑原民子、社浦竜太：大学生における居

- 場所感と大学生生活不安に関する研究 - 学生相談室の利用の有無に注目して -、ものづくり大学紀要、2、65、2011
- 32) 中西新太郎：ポジションどり文化の生きづらさを超えて、生活指導、47 (8)、42、2005
- 33) 吉村英：大学満足度が学業成績および人生満足度に与える影響、京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要、「発達教育学研究」、13、1-16、2019
- 34) 田川隆博：学生満足度の分析 - 名古屋文理大学満足度調査より -、名古屋文理大学紀要、11、81-86、2011
- 35) 下平明美：学生支援における大学生生活不安尺度の活用について - エコグラムとその関連 -、安田女子大学紀要、43、47-56、2015
- 36) 松本耕二：大学生の学校満足に関する分析 - スポーツ経営学科学生調査から -、広島経済大学研究論集、38 (4)、211-221、2016